



ASIAN AND MIDDLE EASTERN STUDIES TRIPOS Part II

Japanese Studies

Tuesday 5 June 2012 9.00 – 12.00

J.13 ADVANCED JAPANESE TEXTS

Answer EITHER section A OR section B.

*Write your number **not** your name on the cover sheet of each Answer Book.*

STATIONERY REQUIREMENTS

20 Page Answer Book x 1

Rough Work Pad

SPECIAL REQUIREMENTS

None

You may not start to read the questions
printed on the subsequent pages of this
question paper until instructed that you may
do so by the Invigilator.

SECTION A

Translate the following passages taken from unseen texts into English. All passages are of equal value.

1

今日、世界を見渡してみると戦争による惨禍は減るどころではない。さらに日本までがそくに、戦争をなくす（あるいは減らす）ために、そして戦争が起きたとしても戦争の犠牲をできるだけ少なくするために、戦犯裁判の経験から何を汲み取ることができるのか。本書は、そうした姿勢で考えたい。

戦後の日本社会は一九九〇年代にいたるまでアジアに対する加害の問題、つまり日本の戦争犯罪・戦争責任の問題にきちんと取り組んでこなった。平和運動にしても護憲運動にしても同様だった。このことは、BC級戦犯裁判についてきちんとした研究がなされてこなかったことと関係しているだろう。戦争放棄をかける日本国憲法の平和主義の理念を積極的に生かしていくためにも、日本がおこなった戦争犯罪の問題にきちんと取り組み、それを引き起こした社会や組織、個人のあり方に徹底的にメスを入れ、それへの反省と改革、被害者への誠実な謝罪と補償の実現を通じて、戦争否定への努力を進めていくべきだろう。本書もそうした取り組みのひとつとして考えている。

私自身、日系日本人男性であり、こうした自分の位置を超えた自由な議論ができるわけではないが、裁いた側、被害者、裁かれた側のそれぞれの資料や主張に留意しながら、BC級戦犯裁判の実相に迫り、その意義と問題点を、戦争を防ぎ、戦争による被害を極力減らそうとする立場から考えてみたい。同時に裁かれなかつた問題も見ることによって、この裁判の特徴と限界も見えてくるだろう。

私はマレー半島をはじめアジアの戦争被害者（多くは日本軍による虐殺からかろうじて生き残った人々）を訪ねて聞き取りをおこなつてきたが、こうした日本の侵略を受け被害を受けた人々の目線を大切にしたい。

本書では、これまで述べてきたような視点を生かし、現在利用できる限りの各国の資料や、アジア太平洋各地の被害者の調査も踏まえ、冷静に裁判の実態とその意味を考えていきたい。

惨禍 calamity

かろうじて barely

HAYASHI HIROFUMI, BCkyū senpan saiban, 2005, pp. 19-20

2

1 違法な戦争の開始

そもそも国民政府によるBC級戦犯裁判が行われることになった原点は、日本が中国侵略を開始したことにあるといわざるえないだろう。

一九三一年九月八日、日本の関東軍は満州の領土化を目指して、中国東北での武力侵略を開始した。⁽⁸⁾ 満州事変の開始であった。これは明らかな領土侵略であり、連盟国⁽⁹⁾の領土保全を定めた国際連盟規約に違反する行為であった。また日本政府（第二次若槻内閣）は「不拡大」方針を掲げつつも、事態を平和的に解決する方針をとらず、傀儡政権樹立による満州支配方針を確定していく。日本政府も実質的に中国に対する領土侵略を政策として進めていったのである。中国に対する武力侵略は国策化し、国際連盟規約のみならず、国策としての戦争の放棄を定めた不戦条約にも実質的に違反することになった。

中国側は満州事変が開始された直後に国際連盟に提訴し、日本が連盟規約と不戦条約に違反していることを主張した。しかしイギリスやフランスといった連盟の主要国は、日本を侵略国と認定することには消極的であり、非連盟国ではあるが中国情勢に深い関わりをもつアメリカやソ連も日本の抑止に積極的に動こうとはしなかった。列国のこうした消極的な対応の間隙をついて、日本は満州占領を既成事実化していく。三年九月に日満議定書を締結して、日本は満州國を国家として承認し、翌三二年二月にはリットン報告書の骨子に則った紛争処理を勧告していた国際連盟から脱退した。そして五月には塘沽停戦協定⁽¹⁰⁾が日中の現地軍レベルで締結され、日本軍と中国軍（国民革命軍）の

question continues....

(TURN OVER

長城線付近での衝突はひとまず終焉を迎えた。

満州事変段階では、日本は中国を侵略しながらも、国際社会から侵略国と認定されることはなかった。しかし連盟が日本を実質的な侵略国として認定する事態は、日中戦争開始後に訪れた。一九三七年七月七日に日中戦争が始まり、八月に全面戦争に拡大すると、中国は再び事態を国際連盟に訴え、連盟が日本を侵略国と認定して制裁を実施するよう求めていった。ヨーロッパでナチス・ドイツやファシショ・イタリアの軍事的脅威が増大するなか、連盟の中核国であるイギリスは日本との関係悪化を避ける方針をとり、中国の要求を必死に抑えつけた。

国際連盟 League of Nations

抑止 check, deterrence

骨子 gist, main point

則る conform to

さなか midst of

IKO TOSHIYA, 'Kokumin seifu no BCkyū senpan saiban – sono ito to genkai', in Awaya Kentarō, ed. *Kingendai nihon no sensō to heiwa*, 2011, pp. 210-211.

3

一九四五年八月一五日の正午、ラジオから流れた玉音放送を聴き、「帝国臣民」は日本の敗戦を知った。現在の日本国内（内地）だけでなく、同じ内地だった樺太・千島、さらには南洋群島でも流れた天皇の肉声は、大日本帝国の滅亡を告げるものだった……。だが、これほど広範囲にわたる地域——帝国の版図——に流れた玉音放送に表われる「良ナル爾臣民」とは誰を指したのか。実はそこに表れる臣民とは、内地にいる「日本人」だけになっていた。「國体護持」をめぐる対立のなかで、「帝国臣民」は一度も顧慮されなかつたのである。

一方、大日本帝国の滅亡を決定づけたボツダム宣言は、米大統領ハリー・トルーマンがたった一人で作り上げたものだった。日本の敗戦にいたるまでに繰り広げられた米国とソ連の二大国の駆け引きは、帝国崩壊後の東アジアに決定的な影響を及ぼしたが、彼らの無知と独善がもたらした悲劇は計りしれないものとなつた。

朝鮮では、京城（現ソウル）で朝鮮総督阿部信行と米軍とのあいだで降伏文書が交わされた。調印日は九月九日。朝鮮支配の終焉となつた重要なこの場所に、朝鮮人は誰一人として立ちあつていなかつた。なぜ、敗戦後一ヵ月近くも京城に朝鮮総督府が厳然として存在していたのか。この八月一五日と九月九日のあいだに横たわる歴史は、朝鮮民族の「解放」と「分断」にまつわる記憶と怨念につながつてゐる。

question continues....
(TURN OVER)

台灣の解放はもつとも遅かった。台北で台灣總督安藤利吉が国民政府とのあいだで降伏文書に調印したのは、敗戦から二ヵ月以上経った一〇月二十五日。暴動や略奪といった混乱もないなかでの台灣支配の終焉は、日本人にとっても台灣人にとっても、もつとも平穏に迎えられたものだった。しかし、中華民国国民として「光復」を迎えたはずの台灣人にとって、期待が失望へ変わったこの日は、帝国臣民としての「降伏」でしかなかった。

KATŌ KIYOFUMI, *Dainihon teikoku no hōkai*, 2009, pp. 8-9.

玉音 emperor's broadcast
樺太 Karafuto
臣民 imperial subjects
怨念 grudge

国民政府 KMT
光復 Chinese term for return of sovereignty
奔走 running around
前哨 outpost

SECTION B

Translate the following passages taken from unseen texts into English. All passages are of equal value.

4

がある。

富山県が号令かけ、県内一斉に行うメリットは

2008年4月、東京都内で、市民団体が主催し、「レジ袋の有料化」をテーマにした集会が開かれた。講演したのは富山県の石井隆一知事だった。会場では県花であるチューリップや地図や観光など数種類のパンフレットが配布された。富山県東京事務所の職員も動員され、さながら富山県の観光P.R.集会の趣だった。

知事がはるばる富山から招かれたのは、同県が全国で初めて県内全域で「レジ袋の無料配布をやめた」点が、この市民団体から高く評価されたからだった。

秋に知事選をひかえ、再選を目指す石井知事は、精力的に動き、話題作りに余念がなかつた。講演では、有料化にこぎつけた苦労話を語り、「県は一度もぶれなかつた」と、胸を張つた。だが、県の関係者の一人はこんな見方を漏らす。「レジ袋の有料化というパフォーマンスも、選挙活動の一つなんでしょうか」

富山県は2008年4月、「レジ袋の無料配布取りやめ」を県内全域でスタートさせた。

これまで、マイバッグの奨励など市民啓発活動を続けていたが、レジ袋の辞退率は頭打ちだつた。そこに、内々で有料化を検討していた地元スーパーから、「県がリーダーシップを発揮してほしい」との声がかかり、2007年、「レジ袋削減推進協議会」を立ち上げた。有料化を行うのが1社だけなら、客は無料配布を続ける店に逃げる恐れがある。でも、みんなで一斉に有料化すれば、客は逃げない。レジ袋の製造やリサイクルにかかる費用を減らせるメリットがある。

**レジ袋削減をスーザーが
後押しした本当の理由**

富山県、富山市

question continues....
(TURN OVER)

人口が110万人しかいない富山県では、地元の有力スーパー数社が力を持ち、全国展開しているスーパーの店舗は少ない。そんな小さな県ならではの、「地の利」も有利に作用した。最終的に協議会に参加した25事業者がすべて有料化に合意、県内の主要スーパーとクリーニング店合わせて2008店舗が有料化に踏み切った。2008年11月現在、43事業者398店舗が増えた。

県内で最多の店舗を持つスーパーは「有料化にこぎ着けたのは、地元のスーパーが強力にスクランムを組んだから。中心になつたスーパーが『事業では競争しても環境では協調しよう』と言つて、他のスーパーをまとめた」と話す。

県と市の内紛と、買い物がごの持ち去り事件

これに対し、あまり乗り気ではなかつたのが富山市。最大の理由は、市民がレジ袋をごみ袋として使つていてことだつた。ごみ出し用の袋を指定してはいるが、レジ袋にごみを入れてもかまわない。だから、お金のかかる指定袋よりも、無料のレジ袋でごみ出しする市民の方が多かつた。

市の担当者はこう疑問視する。「レジ袋の有料化は経済的な刺激を与えて、減らす手法で、事業者が営業活動として自主的に取り組むことに異存はない。しかし、住民が自ら考え、減らそうと行動したわけではない」

富山市のように、家庭ごみの有料化を導入していない自治体では、レジ袋がごみ袋の役目を果たしており、戸惑いを見せる自治体は富山市だけではない。

SUGIMOTO HIROAKI AND HATTORI MISAKO, *Gomi bunbetsu no ijō na sekai*, 2009,
pp.172-174.

号令 command, order

石井隆一 Ishii Takakazu

はるばる from afar

余念なく eagerly, attentively

こぎつける [accomplish something] 滑川市 Namerikawa city

胸を張る proudly showing off

頭打ち reach a limit

地の利 geographical advantage, advantageous position

戸惑い the state of being confused

5 ママから始まる日本の“革命” 放射能から子どもを守るママ・レボ

●座り込みながら編み物

10月末から10日間にわたり経済産業省前で行われた原発反対のアクション「女たち100人の座り込み」。実際は100人どころか、福島から200人超が参加、最初の3日間だけで延べ2400人近くが座り込んだ。日本最大規模の女子会だった。

最初は福島の女性十数人が世話人になり企画を呼びかけた。ネットやツイッターを介して情報が広まり、開始前から、予定を大幅に上回る女性たちがエントリーしていた。ブログの担当者は、1千人分の返信にてんてこまいの日々だった。

こぶしを振り上げる男性のようなデモ活動ではなく、女性らしく、やわらかなイベントもしたいねと、座り込みをしながら編み物をする案が浮上。ネットでそのことを知った編み物講師が「指編みなら、編み棒がいらないから皆でできますよ」と提案してきた。その女性は、現場で講師役のボランティアを務めた。こんなふうに提案が提案を呼び、現地のテント村前で実現した企画の数々は、ユニークで手作り感覚に満ちていた。座り込みをしながらまつたりと指編みでつくった毛糸のロープは、1本につなげられ、「ヒューマン・チェーン」として経産省を取り囲んだ。

事務局を務めた福島県西白河郡在住の女性の夫（40）は、妻たちの準備作業を横目でみてきて、こんな感慨を抱いたという。

「チラシに福島を漢字で書くか、カタカナで書くかというようなことまで、時間をかけて議論したと妻から聞き、男性のように、派閥主義による見苦しい足の引っ張り合いはみじんもないと感じました。テント村に着いた翌朝に、『首相に会えないか』と新たな計画が浮上し、首相に会うと思い定めたら、即申し込みをする潔さ、実行力。男性主導の運動が持ち得なかつたあらゆる要素を、この国の女性たちは持っている。彼女たちの底力を感じました」

●つぶやき、つながる

1歳、3歳、4歳の3人の娘の母親で、「NO！放射能 江東こども守る会」代表の石川あや子さん（34）は、「声をあげれば行政は動く」と実感している。

6月に東京都と江東区に緊急要望書を提出した。事前に、神戸大学大学院の山内知也教授（放射線計測学・放射線物理学）を招いて、区内の放射線量を測定したところ、新宿のモニタリングポストの5倍以上の数値を記録した地点もあり、「東京も確実に汚染されている」と感じた。区内にある都の汚泥焼却処理施設の周辺は、毎時0・2マイクロシーベルトを超えていた。結果を踏まえて、都と区に細かな測定を求めたものだ。

要望書の提出後、都庁で記者会見も開いた。石川さんは音楽家として数百人を前に演奏をしたことはあるが、記者会見は初めて。経験者にアドバイスをもらいながら、場所を決め、プレスリリースには週刊誌の見出しのようなキャッチーな文言を盛り込んだ。会見の連絡をしたのは前日の夕方だったにもかかわらず、報道陣は当初の予想以上に集まった。

for vocabulary see next page...

こぶし	fist
編み棒	knitting needle
毛糸	woollen yarn
西白河郡	Nishishirakawa-gun
横目	a side glance
感慨	being filled with deep emotions
派閥	faction, clique
みじんもない	have not a bit of
即	immediately, at once
つぶやき	muttering, grumbling
江東区	Kōtō-ku
底力	hidden potential, inner resources
知也	Tomoya (personal name)
焼却	burn up, incinerate, reduce to ashes
都庁	Tokyo Metropolitan Government Office
報道陣	press corps

3 身体の洗浄

次に身体そのものの洗浄についてみていく。マクファ

ーレンは前述したように、日本の蒸暑い気候に合った衣のシステムは、汗は体の上で乾かし風呂で洗い流すとしたが、さらに「日本においてはほとんど年間を通じてあまり衣服を身につけなかつたことが、身体の清潔さを向上させるのに役立つた」とさえ言っている。彼がこう述べる、その論拠となつているのは、往時の日本の風呂に関する欧米人の観察記録であり、かつそれをもととしたその先行研究にある。たとえばポンペは「裕福な何不自由ない日本人は毎日入浴する」とし「日本人は毎日風呂に入るきれい好きの国民として知られている」とい、またTh・ジョフリイは「日本では一日に最低一回、ときには一日二回、熱い風呂に入らなければ我慢できないから、わが家の風呂の湯は絶えず温められ、使われ、新しく取り替えられる」(『横浜物語』)と述べている。モースも「日本の労働者階級——たとえば大工、石工などであるが——は日に二、三回も入浴することがよくある」(『日本のすまい』)と述べるが、このような外国人評はその観察記にしばしば記載されるところであり、マクファーレンの議論も「毎日熱い風呂に入浴するという習慣が国民の大半に行きわたっていた」ことを前提としている。それは、これらを引用した日本の研究書にもよく説かれるだけでなく、さらにはこれを拡大した「日本人は古来から風呂好き」で「清潔好きな民族」とかいふた言説は、今日では普通の人々の間にも流通した一般的な語りとなつていている。

風呂や銭湯は、現在、こうした日本文化の象徴として、あるいは日本人の国民性を示す表象として、さらにはかつての銭湯が身分や階層を越えた裸のつきあいのできた、庶民的でふれあいのある暖かな空

question continues....
(TURN OVER)

間として、一種の理想郷として語られる。しかし冒頭で少し触れたような風呂の構造を考えると、果たしてそれは歴史的な事実だったのか。旅の巨人と称された宮本常一は、「戦前全国を行脚した頃の聞取では、東日本では三日乃至五日に一回というのが多かったが、西日本は少なく、とくに奈良県吉野山中などでは一月に一回乃至二回というのが大半という村にぶつかった」（宮本 一九八一）と述べるが、同様な観察は宮本だけではない。人類学者の米山俊直も奈良二階堂村の調査で同様の報告をし（米山ほか一九七四）、自然人類学の香原志勢も長野で一〇年入浴しなかつた人が風呂に入つて風邪を引いた例を紹介している。香原は垢の保温効果にも言及するが（香原 一九七三）、果たして外国人の観察とどちらが事実に近いのだろうか。

風呂の構造と入浴の頻度 結論を言つてしまえば、毎日入浴したという説の、論拠に引用される歐米人の見聞記をよく読めば、先にあげたモースの場合も、大工や石工など、都市に居住し、かつ塵埃にまみえやすい職人に關しての記述であり、またポンペは「裕福な」とあるように、その条件や風呂の形態が問われていない。例には引かなかつたが、よくその論拠となるB・チエンバレン（*日本事物誌*）やバードの毎日という記述は温泉地での情景であり、E・ケンペルの描写は旅の最中の宿屋での（*日本誌*）、またC・ツンベルクの記述も港の船乗り漁師の入浴であつて（*江戸參府隨行記*）、条件や風呂の形態が違えば、入浴法や洗浄法、また入浴回数も異なり、それを日本一般に拡大することは適切でない。

IWAMOTO MICHIIYA, 'Yosooi: Kegare to seiketsu', in Shitani Nakanori, Namihira Emiko and Yukawa Youji (eds), *Kurashi no naka no minzokugaku I: Ichinichi*, 2003, pp. 85-87.

マクファーレン	McFarlane	米山俊直	Yoneyama Toshinao
往時	= 昔	香原志勢	Kōhara Yukinari
ポンペ	J. Pompe van Meerdervoort	垢	dirt, filth
Th ジョフリー	Thomas Jeffery	塵埃	dust, dirt
モース	Edward Morse	チエンバレン	Basil Chamberlain
巨人	giant	バード	Isabella Bird
宮本常一	Miyamoto Tsuneichi	ケンペル	Engelbert Kaempfer
乃至	= または／より。。。まで	ツンベルク	Carl Thunberg
吉野山	Yoshino-yama		

END OF PAPER